世　情

2023 年 10 月 15 日
萩　原　繁　之
静岡県労働研究所理事長(弁護士・沼津市みどり合同法律事務所)

投手との二刀流で大リーグでの本塁打王を獲得した大谷翔平選手や、将棋タイトル八冠を達成した棋士藤井聡太さんの活躍が、ロシアのウクライナ侵攻やイスラエルとパレスチナのハマスとの武力衝突で失われた人々の命をよみがえらせることができる力を持つのなら、どれだけ素晴らしいだろう、などという、無益な妄想を抱く人は、きっと多くはないだろう。あるいは僕自身だけだろうか・・・。

だが、近時の世情の中で、あまりにも、やりきれない思いを抱かざるを得ないニュースが、上記のほか、国内に限っても、ジャニー喜多川氏による膨大な数の方々への性加害の問題、銀行オンラインの、数日間に及ぶ停止、インボイスの導入、私の地元、沼津の市議会における、度重なる、言論抑圧と少数会派いじめと理解せざるを得ない事態、などなどなど、あまりにも(ついつい「あまりにも」を多用してしまわざるを得ない。)多すぎる。

因みに、銀行オンラインの停止という事態に際会して、明日はマイナンバーシステムに起きる出来事なのでは、などと思うのは、僕だけではないかも知れない。

その一方で、大谷、藤井の活躍には、驚嘆する。なかんずく、大谷の活躍ぶりは、王、長嶋、イチローなどという先達と比較しても、桁外れ、空前絶後とすら感じられる。

この我々の世界を取り巻して情報提供される事柄の、非対称性というのか、格差というのか、を、どう認識したら良いだろう。

ウクライナ問題、パレスチナ問題の解決、流血の一刻も早い終結を願う身にとって、自分のあまりの非力さに切歯扼腕せずにいられない。その一方で、大谷や藤井聡太のようにも、自分は、なれないのだよなあ、と、そこでも自分の非力さを思う。

多くのおとなにとっては、年齢も重ねて、大谷や藤井聡太のようになれないことについては、もはや納得しているし、あのようにはなれなくとも、自分には自分なりの人生がある、と考えることができるだろう。

反面で、世界で起きている流血の事態や、比較的遠いところ、近いところで起きている、人権侵害、抑圧、理不尽、生活上の利益の侵害などなどなどについて、自分の非力について、あまり簡単に、あきらめてしまうことは、そうした理不尽を容認することにもつながりかねない、とも思う。

最近気に入っている言葉がある。

「非力ではあるが無力ではない。」という言葉である。我々は、年を重ねるごとに「可能性の不可能性への転化」(この言葉は、今年既に八十六歳を迎えている作家庄司薫氏からの受け売りだが。)を経つつも、それでも、非力でも、微力でも、できることはある、できることを日々積み重ねていくしかないではないか。「決して絶望せず、決して過度の希望を持たず」に(こちらの言葉は、亡くなった大江健三郎氏の受け売りである。)。

ウクライナの問題、パレスチナの問題についても、地元沼津での理不尽に対しても、声を上げ、上げ続けなければ、と思う。